

センサー

(株)東レ経営研究所
未来創造調査部門
主席研究員

安楽貴代美

238



仕事柄、調査レポートや政策文書、業界団体の報告書などを読む機会が少なくありません。近年は生成AIの活用によって、長大な資料でも短時間で概要を把握できるようになりました。数十ページから数百ページに及ぶ資料であっても、AIを使えば主要な論点や結論を整理するのにそれほど時間はかかりません。実際、要約は欠かせない作業です。限られた時間の中で多くの情報を扱うには、まず全体像を把握し、重要な論点を見極める必要があります。要約はそのための有効な手段であり、生成AIはその作業を大幅に効率化しました。以前なら数時間を要した読み込みの第一歩が、数分で済むことも珍しくありません。情報があふれる時代において、要約する力の重要性は間違いなく高まっています。

「何が書かれているか」のおおまかな整理です。しかし、原文を読み進めると、「なぜそれが書かれたのか」まで見えてくる場合があります。どのような問題意識から議論が始まったのか。どのような選択肢が検討されたのか。何を課題として残しているのか。そうした背景は、要約の過程でどうしても削ぎ落とされがちです。

近年、「深い読解(Deep Reading)」や「批判的読解(Critical Reading)」という考え方が注目されています。文章の内容を理解するだけでなく、背景や文脈を踏まえて推論し、書き手の前提や立場まで含めて読み解こうとする姿勢です。なぜこう書かれているのか、あるいはこの記述はどの程度正確な事実の描写なのか。そうした問いかけながら、文章と対話するように読む感覚に近いものです。

まずAIで全体像を把握し、その後で重要な箇所を原文で読み込む機会が増えました。しかし要約は、理解の終着点ではなく、背景や文脈、そして省かれた情報の価値を読み解くための入口です。その意味では、AIによって情報の入り口が増えたことで、むしろ人間の読解力がより試されていると感じます。便利になった一方で、読むことそのものの興行きは、以前よりも深まっているのかもしれない。

要約する力と、背景を読み解く力

一方で、資料を読み続ける中で、要約だけでは得られないものがあることにも気付かれます。最初は要約だけで十分理解できたと感じた資料でも、不足を感じて後から原文を読み返すと新たな発見が生まれます。要約によって把握できるのは、「何が書かれているか」のおおまかな整理です。しかし、原文を読み進めると、「なぜそれが書かれたのか」まで見えてくる場合があります。どのような問題意識から議論が始まったのか。どのような選択肢が検討されたのか。何を課題として残しているのか。そうした背景は、要約の過程でどうしても削ぎ落とされがちです。

「批判的読解(Critical Reading)」という考え方が注目されています。文章の内容を理解するだけでなく、背景や文脈を踏まえて推論し、書き手の前提や立場まで含めて読み解こうとする姿勢です。なぜこう書かれているのか、あるいはこの記述はどの程度正確な事実の描写なのか。そうした問いかけながら、文章と対話するように読む感覚に近いものです。

資料を読む目的は、書かれた情報を吸収することにあります。ただし、その文章がどのような背景のもとで書かれたのかを理解することも、同じくらい重要です。生成AIの普及によって、要点整理や論点抽出は、既にAIの得意分野になりました。しかし、要約された情報を起点に背景を探り、文脈を理解し、省かれた情報の意味を考え、自分なりの解釈や判断につなげる作業は、依然として人間に委ねられているといえます。

また、「書かれていること」だけではなく、「書かれていないこと」に目を向けることも大切です。資料を読む際は、まず記載された内容に意識が向きますが、人間が文章を書く以上、そこには必ず取舍選択が伴います。何を強調し、何を簡略化し、何にあえて触れないか。その選択自体が一つのメッセージになる場合もあります。実際に原文を読み込んでみると、結論として大きく扱われている論点以上に、わずかな数行しか触れられていない課題が気になることがあります。また、業界で大きな議論になっているテーマが、ほとんど言及されていないケースも見られます。そうした「省かれた情報」や「十分に語られていない論点」は、その分野がまだ答えを見いだせていない課題であり、今後の変化の兆しであるとも考えられます。

最近では、まずAIで全体像を把握し、その後で重要な箇所を原文で読み込む機会が増えました。しかし要約は、理解の終着点ではなく、背景や文脈、そして省かれた情報の価値を読み解くための入口です。その意味では、AIによって情報の入り口が増えたことで、むしろ人間の読解力がより試されていると感じます。便利になった一方で、読むことそのものの興行きは、以前よりも深まっているのかもしれない。